

授業を「みる」ことから始めるピアレビューへの模索

—福島大学「第1回 授業公開&検討会」の取り組みから—

岩崎 紀子

(福島大学 人間発達文化学類)

はじめに

本報告は、福島大学において2004年度に新たな試みとして開催されたFDワークショップ「授業公開&検討会」の取り組みを紹介するものである。検討会という〈場〉が、大学教員の授業力量の向上にかかわるピアレビュー（相互研修）の空間として個々の教員（授業者・参観者）にどのように意味づけられたかを分析する。さらに、この経験を授業改善へとつなげていくために、検討会をどのように進めていったらいいか検討していく。

1. FDに対する教員の意識——事前アンケートの分析

FDワークショップの実施にあたり、全学教員に対してアンケート調査をおこなった。項目は、①授業運営にかかわって困っている点・悩んでいる点について（選択肢型+自由記述欄）、②複数のFD事業（講演会、合宿型ワークショップ、授業公開&検討会）についてFD（大学教員の授業力量の向上）としての可能性ならびに自身の授業改善への貢献度という視点からの評価（五件法+自由記述欄）の2つである。

第1回授業公開&検討会の第1弾（11/17）までに回収された19名のアンケート結果を集計すると、以下のような傾向性が見えてきた。

【アンケート結果の集計〔括弧内は回答数〕】

① 授業運営上、困っている点・悩んでいる点（上位6項目）

板書（9） ・ 授業の理解度（7） ・ メディアの効果的利用（6）
質問のさせ方（5） ・ プレゼンテーションの工夫（5） ・ 授業進度（5）

② FD事業に対するFDとしての可能性ならびに自身の授業改善への貢献度

FD事業	大学教員全体の授業力量向上としての期待値	自身の授業改善への貢献度
FD事業一般	3.87 (15)	4.20 (15)
講演会	3.38 (16)	3.44 (16)
合宿形式でのワークショップ	3.69 (16)	3.69 (16)
授業公開&検討会	4.44 (16)	4.44 (16)

自由記述欄で目立った意見として、本学のFDに対する教員全体の意識の低さに対する指摘があった。たしかに回答数の少なさに象徴的であることは否めないものの、回答者の意識傾向を見ると、「授業公開&検討会」は大学教員全体の授業力量の向上と自分自身の授業改善への足がかりとして、他のFD事業よりも優位に挙げられていることがわかる。

昨年度までに実施された本学のFD事業は、講演会で教員個々の自前のフィールドとは文脈を異にする他大学の先進的な実践動向を聞いて授業方法の幅を広げたり、合宿形式のワークショップに参加して新しい授業プラン（導入教育の演習など）を作成するために他学部の教員や学生との情報交換をおこない、自身の授業に対する見方・考え方を自覚化し

ていくというものであった。これらはともに年に1～数回をペースとした、いわば運営者サイドによって準備された〈場〉での研修である。

一方、授業公開&検討会は、今回は初の取り組みのため運営者サイドの準備が必要ではあったが、自前のフィールドにおける〈日常〉を対象化することによって個々の授業力量の向上を図っていく〈場〉である。教員の期待値が他のFD事業よりも高いという点に鑑みて、今回の新たなワークショップの試みは漸進的な授業改善への一步を拓いたといえる。

2. 検討会という〈場〉が授業者・参観者にもたらしたもの——ピアレビューへの一步

第1回のFDワークショップは第1弾(11/17)から第4弾(12/13)までの4回実施され、4学類のすべてから1つずつ授業が提供された。本報告で主に分析するのは第1弾の小野原雅夫氏(倫理学)と第2弾の後藤忍氏(環境計画)の回である。小野原氏の授業は、「チョーク&トークの完成型」といわれる授業者のレクチャーをベースにしながらも、学生が「自分で考える」経験を講義内に実現するためのワークシートを授業の柱にした〈授業スタイル〉をもつ。今回は学生が技術者に「なってみる」経験を通して〈考える〉というケーススタディを活用した内容構成であった。一方、後藤氏の授業は90分間の授業内容がすべてパワーポイントによって構成され、くわえて学生には詳細なレジュメ(A4版10頁にわたる)が配布される。4学類4学年に広くまたがった受講者を抱える特異な授業にあって、食品リサイクルをめぐる環境問題を扱った専門的内容に、いかに学生自身との身近なつながりがあるかを、具体的且つ包括的にとらえさせようとする構成になっていた。

では、上記の授業を参観者はどのように「みた」のだろうか。今回は、授業直後に約60(第1弾のみ90)分間の検討会を開いた上で参観者にアンケートを実施した。第1弾は授業時間を変更して開催され、全学から40名の参観者(検討会には34名)を数えた。第2弾は通常の授業時間に開催されたが、教員14名の参加にくわえて職員6名も参加した(検討会には14名)。検討会では「まずはほめることから」という原則に立ち、参観者全員が一言ずつ感想を述べることから始めた。多くの参観者が、板書の仕方やパワーポイントの活用術、授業者の語りのテンポといった授業技術、教育内容の精選の仕方とそれに適した教材選びの手法、1回分の授業のつくり方に着目し、自分自身の授業をふり返る契機を得たと語った。そのなかで「学生が授業の中で〈考える〉という経験をもつまでには相当な準備・場づくりが必要」、「内容自体は大変高度であったが、ある1つの環境問題が実はさまざまな学問領域に広がりをもっており、自分自身とどのような接点があるかを、所属学類や学年を問わず、学生なりの理解度でもって考えることのできる〈わかりやすさ〉があった。学生から見た〈わかりやすさ〉という視点をもつことができた」、「授業者が思っているほど学生は授業者の指示に敏感に反応はしていない」といった〈事実〉が、学生と同じ〈場〉に位置してみてもはじめて見えたという語りは印象的であった。授業者として授業技術のレパトリを増やすばかりでなく、学生からの視点が教員側に共有されたといえる。

さらに興味深いのは、授業者が自身の感覚と参観者の見え方との間に大きな〈ずれ〉を感じたという語りである。特に小野原氏は、公開日は予定した内容を90分間に収めるために通常以上に焦って授業をしていたが、参観者の多くは「授業のテンポがゆったりしていて学生に親切」という感想を寄せたのである。今回の検討会では、議論のテーマや論点を設けずに感想を語り合う設定をとったが、検討会という〈場〉が参観者のみならず授業者に返していくものを生み出していくには、授業者と参観者の感じた〈ずれ〉のありかを見出し、その〈ずれ〉にこそ議論の焦点を合わせていくことが必要なのかもしれない。